

SODOMY

中野 薫

今、店を出た日本人の男は、前の夜も見かけた。

僕も男の後を追って外に出た。この男は倦んだあげく、ねぐらに帰るだけに違いない。

電車通りに出ると、案の定、男は舗道の手すりに腰を下ろし、電車を待っていた。

僕が背中越しに、肩に手を軽く置いて、
「どこまで帰るの？」

声をかけると、男は長身金髪碧眼の僕の風体に、然程驚きもせず、

「北向きだ」

冷静な低い唖れた声で、薄く笑いを浮かべ、一言応じた。

「北の方なら僕と同じだ。だけど僕の経験では、この時間に北向きの終電は行ってしまつて、もう来ないと思うよ・・・」

男は少しだけ落胆したようだったが、
「そうか。じゃあ歩いて帰るよ」

云つた途端、反対側の車線に南向きの終電らしい路面電車が姿を現し、青白いスパークを放つて、男の横顔を明るく浮かび上がらせた。

濃い眉毛に切れ長の眼、まとまつた小作りな鼻、引き締まつた口元。

歌舞伎役者に誰か似た顔立ちのやつがいる。

「北だと、上賀茂通りまで行くのか？」

「いや北大路まで。紫野通りだ」

「紫野なら知つている。僕の家から近い。一緒に帰ろう」

僕は、スパークに浮かび上がった男の横顔に、僕の異形な風体への訝みと、それに拮抗する好奇心との、瞬時の葛藤を見逃さず、誘つてみた。

すると男は、

「あんた、ビッグボーイにいただろう？」

男は退屈で倦んだ表情を消し去り、早くも僕への興味の触手をいつばいに伸ばして、目を輝かせた。

「そう、気づいていたの？」

「気づかぬ筈がないだろう。あんたは、その背丈だけで、充分に目立つよ」

「そうか。あの店、名前が気に入つたんだよ。今夜で二度目なんだ。でも前の夜も、僕は貴男を見かけた」

「俺はよく行くんだあそこ。あつそうか、そうだな。ビッグボーイか。あんたにびつたりだ」

店の隅で蹲つていたときの、物憂げな表情との落差に、僕は少し失望しかけたが、

「ジャズがそんなに好きなの？」

気を取り直して、追従ぎみに訊ねた。

「うん。嫌いではないけれど、どちらでもいい。ビール一杯で長くいられるから・・・」

「・・・それは僕も同じだよ」

男は、僕の風体を、改めて上から下まで眺め、古びた紺のジージャンの下に着たワイシャツの襟元の綻びや、袖口のちぎれかかったボタンに、目を留めたらしく、

「あんたも貧乏なのかい？」

唐突に云った。

僕は声をあげて笑いながら、

「僕は貴方の国の恵みで生きているのだから贅沢はできないよ」

「そうか・・・留学生って訳だな」

「そうだ・・・」

「何処から、国は？」

「イギリスだよ。これでもオックスフォードのカレッジを出てるんだよ」

これで、男は僕への興味を、簡単に手放せなくなつた筈だ。

「そいつは凄い。専攻は？」

「能だよ」

「能つてあの観阿弥世阿弥のあれか？」

並んで歩きながら喋り続けていたが、二メートル弱の僕の背丈に肩を揃えることに草臥れたらしく、男は取り出したタ

バコに火を点け、実に旨そうに吹かし始めた。

僕はそれを見て、日頃タバコはやらないが、そのときは男にねだつた。

男は背伸びして、僕が啜えたタバコにマッチの火をかざした。僕は男のかざした手に届くように長軀の半身を、文字通り二つに畳んだ。

「それにしてもあんたの大股歩きは俺の歩幅の倍はあるな」

僕は又大声で笑う。その声は古い家並の続いた、夜更けの寝静まつた路地に、響き渡つた。

男が選び取つたいくつかの路地を抜け、歩き通した後、何の変哲もない道の角で男は立ち停まり、僕の方に向き直つて、

「俺の部屋すぐそこだから・・・」

男は僕に対する興味を振り捨てたか、初めて出会つた異国の異形な人間に深く関わる理由がないという平凡な常識に立ち返つたか、手をあげて別れの仕草を見せ、角を曲がりかけた。

「ちよつと待つて下さい」

僕は男の遠慮深さが消極性かに、少しだけ途惑つた。

「僕の家も北大路を横切ると、そこだからちよつと寄つてみませんか、おなかも空いたし何かごちそうしたい・・・ひとりより二人の方が旨いだらう？」

こんな街はずれの夜更けに、食料を仕入れる場所も見当たらず、僕の家の冷蔵庫に何が残っているか思い出せないままに、僕は男を誘つた。

男は思慮深い礼儀を知る大人の顔つきを装うが、僕への持ったばかりの好奇心を捨て去るのは、早すぎるだろうと、僕は僕の経験から気づいていた。

「こんな夜更けにいいのか？ 俺は別にどちらでも構わないんだが・・・」

北大路の電車通りを横切って、行きつけの銭湯の角を曲がると、格子の嵌った仕舞家作りの僕の下宿が見える。表の木の硝子戸を軋ませて開け、僕は男を招き入れた。

土間からすぐの三畳の部屋に男を座らせ、僕はインスタントのコーヒーを入れて出し、冷蔵庫の中を漁り、僅かな野菜の残りとお卵を見つけ、料理にかかる。

「こんなものしかできなかったよ」

油で炒めただけの、萎えたグシャグシャの野菜とお卵がごつたになつた代物を、二つ皿に盛り、飯台に運んだ。

僕が空腹であつたのは事実で、味わう余裕もなくせわしく口に運んだ。男は薄笑いを浮かべて、僕の仕草に見とれている。僕はフォークの動きを止め、

「不味いだろ？」と真底同情した。

「いや、それほどでもない。充分に食えるよ。俺は粗末な食い物に馴れている」

男は特別に皮肉な調子もなく率直に応えた。

僕は日本人が日頃どんな食べ物食べているのか知らない。ましてや家族もないらしい、一人暮らしの若い男が、どんな食事に満足するのか想像もできない。僕は冷蔵庫の野菜ポツ

クスに転がっていたリンゴを二つ見つけ、ナイフと一緒に男に差し出した。

「不味い物を食べさせた償いだ。僕は皮を剥くような器用なことはできない。貴男日本人だからもちろんやれるだろう？」

僕は一種哀願の調子で云つた。

「・・・」

男は癖らしい薄ら笑いを浮かべ、頷きながら、

「高校の頃見たジエームスボンドの映画で、リンゴをナイフで削りながら口に運ぶシーンがあつたな。こうやって・・・あんなアレ見たことないか？」

男は思つたとおり、器用に素早くリンゴの皮を剥き、削つた一片を口に運んで見せる。

「007だろ。そんな場面あつたかな？」

「西洋人は果実をだいたいああいう所作で喰うんじゃないのか？」

「・・・どういうことだ。僕はそうとも思わないが」

「うん、強すぎる警戒心の表れなんじゃないのか？ 狩猟民族特有の・・・外敵を片時も忘れられない・・・」

意味ありげな薄ら笑いの割りには、無価値なティピカルなことを云う。僕は再び失望しかけるが、

「そうか、そういう解釈もできるかな。僕はそんなこと考えたこともない」

口先だけのお追従で応えた。

男は薄く笑つたが、

「それがナイフとフォークの食事と、箸だけの作法の違いだ」

僕は男が今思いついたことを、深い思索の果てに考え出したともいうように断言するのに少し腹が立ち、僕がこんな夜更けに男を招き、作り慣れない料理まで振舞った理由の一端を仄めかす誘惑に駆られた。

「でもあれ、毛ムクジャラの男つばい男にしか似合わぬ草だよ。一種のセックスアピールだ。僕は気持ち悪いよ、あんなの・・・」

男は再び、薄く無言のまま笑う他、ないらしかった。

僕は週に二回大阪の教室で英会話を教えている。このアルバイトは結構疲れる。まったくかけ離れた言語感覚のチビな日本人に、こんな形で会話を完全にマスターさせるなど至難の業だ。僕自身日本語は喋れるけれど、思うように書けないし読めないことも、頭が疲れる原因だ。

駅前の繁華な通りに面したビルディングの十回にあるその教室に通つて来る日本人の殆どは、英会話を修得することが生き抜く上で必要不可欠の執念であるとは、どうしても思えない。しかし、ここで得る報酬は、僕の留学生活に必要な不可欠だ。

その日の夕方、僕は右脳の中樞が麻痺し、京都に帰る電車の中で、アクビを嘔殺した。いつもなら、偶々僕の近くの席に腰を下ろした、僕の美意識の篩いにかかった若い男に、

流眇をおくることを楽しんだりするのだが、その日は虚ろな視線が中空を漂うだけで、他者への興味の触手は、少しも動かない。こんな日は早々に下宿に戻つて、強めの酒を煽つて眠るに限ることくらい、僕も知っている。暮れなずんだ三条大橋の袂の駅に降りたとき、そのまま北方向の路線バスに乗り継げば、そのようにできることも知っているが、僕は駅前広場を横切り、陸橋を上つて河原町へ足を向けた。

僕には低すぎるビッグボーイのドアを押すと、夕暮れ間もないジャズ喫茶は、二三組の一人客が隅の席で、虚無に満ちた振りをした白人の歌手が、黒人を真似て歌う類のブルースに、聴き入っているだけで、たしかサトシと名乗つたこの前の男は、いなかつた。

アメリカの南部の貧しい黒人の古いブルースが、この国の人びとの精神にどんな種類の共感を与えるのか、僕には解らない。イギリスのパブは、その日の労働の疲れを癒す、ある階層の人達の社交の場所であることは、世界中に知れわたっている。

この国のいちばん古い街に、アメリカ人でさえ忘れ去ろうとしているセンチメンタルな情感に、黙然と聴き入る若い日本人があるだけでも、僕にとつては驚きだ。生きる目的を見失つた人びとが、この国に溢れている証でもあるのだろうか。

しかし、僕のセクシャルな趣味に、それは都合がいい筈だ。僕の癒し難い生来の疵は、ビール一杯で倦み疲れた時間を潰すことができるほど、ナイーブではない。

僕は僕の趣味を涉猟し、この国の古典文化を学んだ証を得るために、この国に来た。だから僕が今夜、疲れを押ししてこの店に足を運んだ理由は、実に明確なのである。

髪にウェーブのパーマをあて、歌手のドノバンに似たヤセギスの若いウェーターが、僕に対するハニカミを隠し、注文の品を訊ねる。僕はウイスキーのストレートを頼んだ。Wサイズのタンブラーに注がれた琥珀の液を一気に煽ると、いかな長軀の僕であれ、酒のエキスがすみずみまで染みわたり、疲れが身体を離れた。

僕はさつそく、いつも携えているカバンの中から、薄い英国製の便箋と罫線の入った下敷きを取り出し、ロンドンから南東に百キロほどの、カンタベリーという街に住む僕の父親と弟に、手紙を書くことにした。

僕は久しぶりに英文字だけで綴るフレイズの、懐かしい感覚に浸った。そして完璧に麻痺していた言語中枢のネジを巻き戻したところ、椅子に腰を下ろしたままの僕の耳元で、僕の名を呼ぶ、嘎れた低い声を聴いた。

「おおサトシ、やつぱり来ましたか。貴方はよく僕の名前覚えていてくれました」

サトシはくだんの薄ら笑いを浮かべながら、
「あんたも俺の名前ちゃんと覚えてるんだろう」

含羞をも隠した擲揄の調子を漂わして、云い返した。

「さすがに綺麗なスベリングだね」

書きかけの僕の手紙に目を落して云う。

「そうこれ僕の国の言葉だから」

僕は文の切れ目まであと数行のところだったので、そのまま手紙を書き続けた。

サトシは黙ったままでペンの動きを見つめている。

「貴男今夜は何？」

僕は文に区切りをつけ顔をあげて、云わずもがなに訊く。

「うん。いつも通り他に何もすることないから・・・」

サトシは笑わずに応えた。

「何もすることが無いんじゃないかって、つまりしたくてもできないんじゃないの？」

僕は微笑みを作りながら云ってやる。

サトシは大きな目を瞬かせて伏せ、いつもの癖の薄ら笑いとは違った、弱弱しい人の好い顔つきに崩れた。

サトシにとつて凶星であつたらしく、

「あんたこそ何？ 今日は何？」

歌舞伎役者に似た、仮面のような顔に素早く戻し、訊き返した。

「僕は週に二度、大阪の教室で会話を教えています。今夜はその帰りで、少しクタビレタから、今一杯やつたところなの」

卓上に置いたままの空のグラスに目をやりながら、近頃覚えてばかりの殊更めく云い方で応じる。

「・・・それ誰への手紙？」

サトシは遠慮がちに訊ねた。

「これ郷里の父親と弟への近況報告だよ」

「あんたこつちに来てどれくらい経つのか？」

「そう、東京に十二ヶ月、京都で七ヶ月」

「そろそろ里心のつく頃だな」

「サトゴコロ、それ何？」

「ホームシックつてこと」

「・・・だから週に一度こうして手紙書いてるの」

僕はカバンの中から、国を出る前コダックのポラロイドで撮った弟の写真を取り出して、サトシに見せた。

「へえーやっぱあんたに似てるよ」

「そう。似てるかな・・・、似ててあたりまえだけど」

「彼は何をしている人？」

「弟はブルーカラーだ。でも勿論僕より収入は多いし、数段大人なんだ」

「この場所は？」

「うん。僕の郷里であるカンタベリーという街の酒場だよ」

「カンタベリー・・・カンタベリー・テイルスのカンタベリーか」

「そう、チヨースー。貴方よく知ってたね」

どういふ訳か知らないが、サトシはさも嬉しげに笑った。

知らぬ間に店の音楽が変っていた。英語を喋る国の人間なら、それも知性に価値を持ちたがる階層の者なら、心動かせられる、美しい響きと発音の、女の歌声である。展示されたジャケットで、思ったとおりクリスコナーであることが分かった。

「サトシ、この歌手知っていますか？」

「知らない初めてだ」

「CHRIS・CONNOR、この女の発音は大変美しい、奇麗だ」

僕は東の間目を閉じ、眼前の光景を消し去り、ここが極東の涯の国であることを忘れようと努めた。

僕がすぐに目を開けると、サトシはいつも通りの薄笑いを浮かべ、無言で僕を見つめている。もしかすると、これはサトシだけではない、この国の人びとの特質である、典型的表情ではないか。

「サトシ、あそこの隅の席に女の子に囲まれて座っている白人の男がいるだろう」

僕は日本人の若い女三人と、赤ら顔の男をサトシに合図した。こいつを僕は京都でよく見かける。アメリカ人である。

口元は白い歯を見せて笑っているように見せてはいるが、自分への全身の歓心を隠せない女達への蔑みを、その笑いで巧みに隠しおおせた、と慢心しているに違いないのが、僕には手に取るように分かる。

「あいつはこちらでよく見かけるアメリカ人だけど、ああして京都の観光に来たらしい日本の馬鹿な女達を漁ってるんだよ。生理的にいやだよ。あんなタイプの男」

「・・・」

男の身体の何処かに触れていたいか、自分の身体に触れられたいという欲望を隠すこともできないでいる三人の女達は無論、僕と同じアングロサクソンの男に、より強い憎しみの

情を持つ。

「えつ、生理的に・・・？」

サトシは瞬時、怪訝な顔をしたが、少し間を置いて薄々思
い当たつたように、僕の顔をまじまじと見て、ニヤリと笑つ
た。

「そうだよ、生理的に鳥肌が立つんだよ。あんな奴」

「そうか、俺には観光旅行で知り合つた、こちらの若い娘の
好奇心に晒された、人の好い外人にしか見えないが・・・」

サトシは故意と、無関心な、上面だけの、ノンシャランな
云い方をする。

僕はサトシの真意を隠した、しかし、見抜かれ易い表情を、
背筋を伸ばし上から見据え、

「それこそ人の好い観察だ。あの男のペニスはずでに血液で
満たされかかつてるんだ」

僕は笑いながら、しかし、少し強い調子で云う。

サトシは気負されたのか、目をパチパチ瞬かせ、慌てて話
題を変えた。

「それにしてもあんた、誰かに似てるな」

「そうだろう。ジョンに似てるとはよく云われるよ」

僕は、サトシが少し気の毒になつて、話を合わせてやる。

「ジョン？ あのビートルズのジョンレノンのことか？」

「そうだよ」

「言われてみればそうだな。肩まで伸びたブロンドの巻き毛、
切り立つた鼻。薄く紅い唇、緑なしの丸い眼鏡、ジョンより
あんたの方が男前だよ」

「ありがとう」

僕は素直に頷いてやる。

店の音楽がフリージャズの無秩序な増音楽器の集積に変わ
つた。

サトシは暫く無言で目を瞑りリズムに合わせて身体をゆら
し、聴き入る努力をしているらしかったが、突然いたたまれ
ないという風に、

「俺、こんな音楽大嫌いだ。やつぱりたえられない。じゃあ
いつか又会える日まで」

急に、席を立ちかけた。

僕は少し慌ててサトシを呼びとめ、座つたままでも充分屈
く、サトシの耳元に顔を寄せた。

「明日の夜、僕の家でするパーティーによかつたら来てくれ
ないか」

強烈に響きわたるギターの音量に負けぬように、大きな声
で言う。

サトシは切れ長の目を瞬かせ薄く笑い、

「いいのか？ どうせ俺には何の予定もないしできるだけ行
くことにする」

右手を軽く上げ店の扉の方に歩み去つた。その後姿は少し
哀愁を帯びて、僕には好ましかった。

僕がオックスフォードのカレッジで日本語専攻を決めたの
には、それほど深い意味はなかった。経済や法律ましてやテ
クノクラートを目指すには、僕の神経は柔らかすぎた。植民

地支配時代の栄光の、わずかな残りを、小出しに費消する他はない、競争のきびしい英国の中核に居残り、名誉や安定を手に入れるためには、絶え間ない刻苦が必要であることを、僕は知っている。僕の生来の癒しがたい疵が、その刻苦や骨肉相食む凌ぎ合いに決定的に不向きなのも解りやすい事実だ。そして端的に僕の当時の成績は、上級課程に紛れ込むのがやつとで、選択の意思まで通じる筈もなかった。

大学のパーティーで、自信に溢れたように見せつける、本心を胸底に隠し遂せたと慢心したエリート臭が漂う連中の、手垢のついた使い古された機知の組み換えに過ぎない会話や、英国のエスタブリッシュメントに通有の気取った英語の発音に、耐えられなかった。

嫌でも目立つ長軀の僕は、いつも部屋の壁に貼りついて、鼻白み時をやり過ごす他、手立てはなかった。

それを考えると、今夜のパーティーなど、比べようもなく気楽なものである。この国の人はどうも和みを好むらしい。畳の上に腰を下ろして円卓やテーブルを囲み、ひとつの話題にみんな一喜一憂し合う。それほど面白くもない軽口に、声を上げて笑う。笑うことで、この世のウサを晴らすのだという。

僕の家の元来の借主であるベルギー人のウィリー夫婦と、三畳の間に居候中の齒科技工士のヒデオが連れて来る知り合いが、この家のパーティーの常連である。

今夜のパーティーは、僕が東京にいたころに知り合ったケンゾウが京都に出て来て、針金細工の路店を始めた歓迎会を

兼ねていた。ケンゾウはこの国のヒッピーの元祖なのだという。束ねた髪を腰までたらし、夜でも漆黒のサングラスをはずさない。声をかければ返事はするが自分から話そうとしない。時々お経らしい意味不明の一節を口にする。部屋に香を焚いて瞑想するのが趣味であり、彼が近くに來ると、寺の坊主と同じ匂いがする。この国のヒッピーが、何を表現したいのか僕には見当もつかない。

大皿に盛った竹輪や蒲鉾、干し物の類の粗末な肴だけで、特別の料理など何もなかった。ドライジンとウイスキーそれに日本酒と梅割りの焼酎、酒だけは豊富にあった。

八畳の畳の部屋で各々が寛ぎ始めたころ、表のガラス戸が軋みを上げて開いた。僕は丁度、台所に立つて馴れぬ包丁さばきでチーズを切っていた。

「サトシ、よく來ました。上つて下さい」

「・・・」

サトシは無言のまま靴を脱ぎ、部屋に上つて空いた隙間に腰を下ろした。

「サトシ、酒は、日本酒？」

「うんそれでいいよ」

僕は一升瓶から直接コップに酒を注ぎ、サトシに手渡した。

「この連中、日本のヒッピーの中心人物やヨーロッパからの留学生達で、みんな気兼ねのいらぬ人たちばかりだから、紹介は抜きでいくよ」

サトシは少し笑って、無言のまま頷く。

普段は無口のケンゾウも、酒が入ると元氣が出るらしく、

片言の英語で、誰彼となく話しかけていた。僕はその変りよ
うに、失望をとおり越し、どこか稚い可愛らしさを感じた。
ケンゾウは、周囲にいた連中で、数少ない日本人のサトシ
に、しきりに問いかける。

「あなたは誰でしたか？」

「・・・」

「私の知り合いじゃないね。私の知り合いに、こんなノーマ
ルな顔つきの人はいない。あなた時代劇の役者みたいだ。そ
の他に何の特徴もないようだ。水をかければ溶けてなくなる
障子紙のような人間だろう？」

「・・・」

サトシは暫く、いつもの薄笑いで応じていたが、最後の言
葉で意を決したらしく、顔つきを変え、スツクと立ち上がる
と、上り框の方に人をかき分け歩み寄り、靴を履きかける。

僕は一部始終を、隣の三畳の間から見ていた。

「サトシ、もう帰るの？ まだ来たばかりじゃないか」

僕は哀切な調子をこめて云う。

「うん。俺には場違いのところらしい」

「そうか・・・じゃあ僕も抜けるからちよつと待って下さい。

今夜は僕につき合ってよ。特別な用件でもあるの？」

「・・・」

サトシに急ぐ用事などある筈もないことを知りながら云つ
た。

僕は奥にひっこんで、源樹を連れ出した。源樹は京都に来
て、最初に知り合った日本人だ。僕の家のおすぐ傍にある禅宗

の寺の次男坊であり、高校で英語を教えている。語彙は豊か
だが、あの発音でよく人に英語が教えられるものだ。しかし、
日本の英語教育は、読み取りと文法が主眼であつて、会話は
もっぱら個人的やる気にかかつているのだから、それで良い
のだと云う。

源樹は髪をピシヤリと七三に分け、言葉遣いも京都訛りで、
穏やかな常識人である。

「この人がさつき話したサトシだよ」

僕は玄関を出た路地で、源樹をサトシに引き合わせた。

源樹も又、サトシの薄笑いと少し質が違うが、常に温和
な笑いを絶やさない。

「僕は岡村源樹といひます。伏見の高校に勤めています」

「ゲンジユ？」

「そう、ミナモトのキと書きます」

「彼はすぐ近くのお寺さんの倅なんだよ。僕とはすぐその
銭湯で知り合った」

僕は会話を引き取りサトシに云う。

「・・・私、中島慧です」

サトシはさつきのケンゾウの揶揄からまだ立ち直れないの
か、日頃より一層唖れた低声で応じた。

「サトシさん・・・何をやっておられる方ですか？」

「・・・R大の学生です」

「専攻は何？」

さすがに源樹は常識人だ。ひきかえ、僕はサトシの来歴を
一つも訊ねていなかった。しかし、それは僕にしてみればど

ちらでも良かったが。

「いや。大学生というにはほど遠い立場なんです。学校なんて久しく行ってません」

サトシは偽悪ぎみに応じたが、直ぐに目を伏せ地面を見つめる。

「今から比叡の頂上のライブスポットに生ジャズを聴きに行くんだがいいだろう？」

僕は上半身を折り曲げ、伏目のサトシを下から覗き込むように訊ねた。

「俺は別に構わないんだが、いいんでしょか？」

サトシは顔を上げ源樹に訊ねる。

「どうぞ気兼ねなく。私の車で連れてつてあげますから」

源樹は安定した温和な笑みを絶やさないう。

闇に閉ざされた幾重にも曲がりくねった峠道を越え、星の光が数を増したと思える、空気が澄み渡った高度まで車が登りつめ、平坦な直線道路に出て、通り際にポツンと仄暗い灯りに浮き出た一軒の洋風の家が見えた。

このライブハウスは源樹の姉が切盛りしていたが、禅寺の宗主である源樹の父親が、門徒の寄進だけで食いつなぐことに倦み、開店したのだという。僕は幾度か連れてこられて知っていた。奥深い比叡の山中に、場違いな趣きが幸いし、ここその賑わいを見せ、収支は寺の経営に潤いを与えているという。日本の伝統ある古寺も、継承にはそれなりの苦勞があるものらしい。

十坪程の狭い部屋のフロアに、ドイツ製のグランドピアノが据えられ、今夜はピアノトリオが演ずることになっていた。

カウンターの席に座ると、三人の男が無表情にフロアに出てきて、各々の楽器の位置について、チューニングした音をたしかめあつていった。源樹はカウンターの中の女と何か軽口を云い合っている。やがてチューニングの音が止むと、ピアノトリオはオリジナルらしい、僕の知らないテンポの速い曲を弾き始めた。狭い部屋にドラムの音だけ響いて、少し聴きづらかった。ギリシャ哲学の使徒に似せたのか、アゴヒゲをたくわえた華奢な細面のピアニストが、次の曲のバラードをゆるやかに奏で始めると反つて、生の演奏の迫力を感じた。

稚い顔立ちのドラマーが、ライドシンバルの大仰な響きを曲の隙間に戯れのように入れる。その度、僕は彼にウイंकを送った。するとその少年ドラマーは、一脈通じたという無言の諒解を示す作り笑いを、僕に送り返した。

おそらく僕の風体を見て、モダンジャズという西洋文化の成れの果てに関わるオオソリティーを、錯覚したに違いない。つた。

西洋人がすべてジャズを好む訳でもないのに。

僕は猿のような顔立ちのそのドラマーに、今度は親愛めかして投げキッスを送ると、彼は再び大仰なシンバルの音を狭い室内に響き渡らせた。

サトシは店に入ってカウンターの席についたまま一言も喋らない。僕が横合いから顔を覗き込むと視線をそらし、日頃

の薄笑いも見せず無表情のまま、カウンターのの中の女に、

「煙草置いてますか？」

唐突に声をかけた。

女は聞きもならしたらしく、

「何か云いましたか？」

サトシを見つめる。

「煙草あるかと云ってるの」

サトシは僕と出会って初めて見せる屹然とした表情で云い返す。女はドギマギとしたがアメリカ製のケントを柵から一箱取り出し、手渡ししながら、

「うちにはこれしか置いてませんけど、よろしいですか？」

京都訛りの、きつい口調で云う。

「チエッ！ 気障な店だ」

サトシはズボンのポケットから小銭を取り出し女に手渡ししたが、その指先が微かに慄えていた。

僕は傍に居る源樹に、サトシの吐き捨てるように云った呟きが聴こえていないか、ヒヤリとしてサトシの耳元に顔を近づけ、

「サトシ、この店、源樹の姉さんの店だからリラックスしていいんだよ」

小声で云ってやる。

「俺はこんな身に染まぬ見せかけの弛緩なんて真平だ。場違いだから帰りたいけど、こんな山の中じゃ一人で帰られもないよ」

サトシは低声ではあったが、真に苛立ちを隠さずに視線を

ずらしたまま云った。

僕はサトシの資質を誤解したのかと、軽い失望を感じたが、まだ望みを捨てるほどではないと思ひ直した。

帰路、峠を下りる車の中で、僕は再びサトシを誘った。

サトシの異性への仕草を確かめたかった。

「知り合いのオーストラリア人の留学生を知ってるんだけど、僕これから家に寄ろうと思う。サトシ来るかい？ ゲンジユもよかつたらどうかかな？」

源樹は明日の仕事にさしつかえるからと辞退した。

サトシは黙ったまま相変わらず不機嫌だった。僕は無視したふりをして、源樹に頼み強引に、車をメロデイスというそのオーストラリアから来た留学生の家まで着かせた。

サトシと僕は車を降り、源樹は帰った。

満天の星空の下に、数軒のプレハブ作りの極めて安普請な家々が見えた。

「あそこのいちばん奥の部屋がメロデイスの部屋だ」

「メロデイス？」

「そう。ロマンチックな名前だろう。彼女は本当真面目な女の子だよ。日本の近代文学を研究翻訳している。読むことにかけては僕より日本語は数段上だ」

「・・・」

メロデイスはもしかすると処女のままでないか、と日頃僕は思っていた。僅かに褐色を帯びた黒髪や低い背丈は、日本人といつてもおかしくない。薄いブラウンの瞳と鼻梁の鋭

さて、やはり僕と同じアングロサクソンの血が流れていることを感じさせる。僕が此地に来る少し前から住みついでいて、大学の研究室で知り合った。

粗末な作りの合板のドアをノックすると、深夜にかかわらず彼女は起きていた。少し驚いた警戒の色を示す顔つきに見えたが、僕の顔を見るとすぐに安堵の表情に戻り、会釈がわりのキスをかわす。

サトシは明かりの届かぬ少し離れた場所にいたので、メロデイスは気づかなかつたらしく、僕との抱擁を解くと気配を察し、

「誰かといっしょなの？」

訝げに英語で云った。

「最近知り合った日本の友達を連れて来たんだ」

僕は日本語で応えた。部屋に入りながら、

「君もライブに誘いたかったが、ジャズに大して興味もないだろうと思ったし・・・」

「そう。私ジャズは余り知りません。誘ってもらわない方が良かったよ」

柔らかに微笑んで云う。

僕はメロデイスのこの笑顔が好きだ。穏やかで平和で、優しくノスタルジックだ。遠い昔、子供のころ、僕の周囲の誰かがこんな笑い方をしたのを憶い出す。

「この人サトシといって最近知り合ったばかりの人です」
僕は改めてサトシをメロデイスに紹介する。

「・・・」

サトシは無言で頭を下げた。

「あなた今夜はどうも気分が悪いらしい。さつきから黙ってばかりだ。僕がパーティーに誘わなければ良かったかな」

僕は笑いながらサトシに云う。

「いやもういいよ。こんな美女を見ると誰でも機嫌なおすよ」

サトシはメロデイスの顔を見つめながら、例の薄い笑いを作って云った。

「私も小説はよく読む方なんですが、どんな日本の作家が好きなんですか？」

サトシは唐突に、シャイな内面を見透かされることを嫌うたらしく、話題を変えた。

メロデイスは、サトシの素早い気分の変動を理解できぬらしく、やや疎んだ表情を見せたが、

「そう今、芥川の短編を翻訳しているところです・・・でもまだ練習の段階で・・・」

謙遜して云った。

「芥川は高校の頃よく読んだ。現代作家はやらないんですか？」

「ゆくゆくはやる筈ね。でもまだまだ・・・」

「シマオ・トシオ、なんかどうですか？」

「シマオ・トシオ？・・・私知らないね、その作家」

僕もその名は初めて耳にした。メロデイスは愈々困惑したらしく、浅黒い肌をそれと解るように赤らめた。

「メロデイスは真面目で勉強家だから、きっとその何だった

か・今サトシが云つた作家まで到達する筈だよ」

僕が取り成すと、

「この作家、僕が今読み耽つているから何の意味もなく云つたんだが、たとえば三島ほどには売れてないね」

サトシはやつと自らの得意なテリトリイに話の矛先が向いたためなのか、今までの不機嫌を一举に払拭したらしかった。

「ミシマ？ ユキオ・ミシマのことか？」

僕は三島にはかなりの興味を持つていた。

「そう三島由紀夫」

「ミシマはホモに負けた」

僕は何の脈絡もなく、三島という世界的にも有名なこの国の作家に関して、僕がもつとも興味を抱く事柄を口に出す。

「それ、どういう意味だ？ あいつは本当にホモだったの？」

「そうあなた知らないの、そんなことも」

「知らんよ。三島の小説は人並には読んだけれど、作家の実像にまで到達するほど深入りはしていない。会ったこともない人だから知る訳がないだろう。ただ断片的ゴシップでなら聞いたことはあるけど・・・」

サトシは情熱に溢れた云い方をし、まったく元氣を取り戻したようだった。

「あいつはホモのままです社会生活を維持する努力を途中で投げ出したのだろうか？ 仮面を冠ることに最後は疲れたんだよ」

僕は自分の身に合わせた意味を含ませて云う。

「そういう意味でなら俺にも少しは解る気がする。本当の自分をさらけ出し、平易に磊落に此の世を生き抜く放埒さがなかったんだらうよ。余りに知的であり過ぎた人間の結末なんだらう。しかし、あの作家が本当にホモであつたかどうか俺には解らん」

サトシは吐き捨てるように云つた。

「作品のどれもこれも、これはとてもかなわねえというものばかりだ。知的昂揚感と日本語の駆使力なんて、才能の魔としか思えないと俺は思うよ。しかし、俺の生活にたいした影響は与えない。余りにかけ離れ過ぎているんだよ。知識といふか才能の総量が」

サトシがこれほど知的科白を吐くとは思わなかつた。自力で此世を渡り切る能力に乏しい、僕のセクシャルな趣味に好都合の人物であると思つていた。僕は失望を通り過ぎて軽い絶望を感じ始めた。否、まだそう捨てたもんでもない。これは単なる空元氣なんだろうと思つた。ヒッピーのケンゾウに愚弄された感情のシコロを残して、精一杯の虚勢を張っているのだらうと思つた。

「それにしても、サトシは急に饒舌になつたな。やつとケンゾウの言葉を振り払つたらしい」

僕が故意とそつぽを向いて独り言を云うと、サトシは大きな目をきつく見開いて僕を睨みつけ、

「ヒッピーの元祖か何か知らないが、夜に黒メガネかけたつて見えるものが見えなくなるだけだらう。何の意味もない。

男でありながら髪の毛を腰まで垂らしたつてそれが個性の主

張にどう結がるのか俺には理解できん。髪の毛ぐらいほったらかせば誰でも伸びるんだよ。すきずきといえばそうだろうが、俺には何の影響も与えない。個性なんてものひたかくしにかくしたってどうしようもなく噴出してくる病気みたいなもので、個性の主張とかいう煩わしいこと俺にはできないよ。あんたが能や歌舞伎に自分の裡に見当たらぬエキゾティシズムを感じるのと同じで、知ってか知らずでか、あの人も衰弱しつつある西洋文明の新しい表現の一形体として、同一感覚を味わいたいだけなんだろう。その程度のものこの国だけで生きて死ぬ人に、何のインパクトも与えないよ。例えばあんたが着物を身に纏って街を歩くのと同じなんだよ。嫌いだよあんなの。格好悪いよ」

「それは少しだけ頭に来た。僕は少しだけ頭に来た。」

「それ僕がやってる能の勉強まつたく無駄骨だよと云ってるように聴こえるよ」

「・・・」

「イギリスがどんな国だか行ったこともないから俺の知識の範囲でしか解りやしないが、日本が明治の文明開闢以来取り入れた西洋文明の源を生んだ象徴的な古い国の一つであることは事実だ。そこで、あんたは、あんたなりに、インテリとしての地位が欲しいんだらう？ その材料で、この国を選んだだけじゃないのか？ メロデイスさんも事情こそ違え、一

緒じゃないの？」

メロデイスは、サトシのまくしたてる日本語を理解できぬらしく、小首を傾げ、両手を少し広げて、俯いてしまった。

「サトシ、貴方のご高説は面白いよ。でも僕それだけで此地に来た訳でもないんだよ」

サトシはシニカルに笑いながら、

「・・・他に理由があるの？・・・そう、薄々解ってるんだよ。あんたの挙措振舞いであんたの性向が・・・」

僕はニタリと笑い返してやる。

サトシは微かに頷き返して、今度は微笑ではなく、小さく声を上げて笑った。するとメロデイスが、遠慮がちに言葉をはさんだ。

「いつかの夏の夜に、私のこの部屋に近くに住んでいるらしいS大の学生が、下着一枚で忍び込んで、眠っている私の布団に入ってきたの。私はビックリしたけど、すぐに冷静さを取り戻して、何しろ、その学生、私よりヤせていて、力が弱そうだったから、反対にお説教してやったの。もし仮に貴男が私を犯すことに成功したとしても、そんなセックスで、まともな人生歩めやしないわよって・・・」

何で今このときにメロデイスがこんな話を持ち出すのか、僕はすぐには呑み込めなかつたけれど、メロデイスの視線は僕にはなくサトシを真直ぐに見つめて、サトシの反応を確かめるようにしているのが解ったので、少し理解できたような気がした。

まだメロデイスは話し続ける。

「その学生、今度は涙を流して私にあやまるのよ。それを見ていて私なんだか、その男が憐れになつて、コーヒーを出してやると、その人、おいしそうにカップに一杯のコーヒーを飲み干して、私がそのドアを開けてやると、下着一枚のままうな垂れて出て行つたわ」

サトシは、メロデイスが何故この話を今するのか、薄々覺つたらしく、

「ご心配なく私はそういうタイプの人間ではありません」と笑つて見せて、

「でも貴女は相当に気丈な人らしいね」

目を大きく見開き、メロデイスに云つた。

「キジョウ？ それ何？」

メロデイスが訊ねると、

「そう・ファイティングスピリットがたくさんあるつてこと」と

サトシは笑いを絶やさずに云う。

ホモセクシャルとしての僕の性向から見ると、サトシは隙の多い誘惑し易いタイプの同性に見えたのだが、メロデイスは、早くもサトシを他の数あるメスを欲するオスの種族の一つとして見なしたようだ。

僕の間も曇りかけたのかと少し寂しくなつた。僕が目をつけた獲物は、それなりの手触りがあつたのだが、サトシに關しては錯覚であつた、と云うべきなのか。

サトシは、メロデイスの言葉が途切れたところで、

「さあ、こんな夜更けに淑女の部屋に長居するなんて無作法

もいい加減にするか。ステイブ、君は女性に対し何の危害も与えぬ免罪符を最初から持つてゐるらしい。俺はそろそろお暇することにしよう。メロデイスさんとは二度と会うこともないでしょうが、貴女が日本の近代文学を研究され続けるのなら、ミシマユキオは勿論、シマトシオは忘れてはならない作家です。いつかきつと手に取る日が来るに違いありません」

サトシはスツクと立ち上がり、いつかの夜に下着一枚で退散したという変態の大学生と同じ出口へ向かいかけた。

僕も後を追ひ、

「メロデイス、ごめんなさい。遅くに悪いと思つたけど、おじゃました」

日本語で云うと、メロデイスは柔らかく笑い返して、貴方はいつでも歓迎よ、と英語で応じた。僕はメロデイスを軽く抱きしめ、唇に軽くキスをした。いつも思うのだが、僕が小柄のメロデイスを抱きしめると、大人が子供をあやす姿になる。僕は女性に対しセクシャルな興味は少しもないのだし、ただメロデイスの柔らかく人懐っこい笑顔と精神性に魅かれるのだから、この姿は普遍的な情愛のシルエツトと見なされても良いのである。

出口のドアを開けたまま、サトシはすでに外に出て、僕とメロデイスが交わす抱擁を見ていたらしく、

「君らの習慣は譬え形式だけであつたとしても、堂に入つて、スムーズで何の違和感もない。日本人がいくら西洋の文化や風習を重んじ取り入れても、会釈代わりのキスまでも取り入

れることはできんよ」

再び講釈を繰り返す。

僕はウンザリとしたが、乗りかかった舟であり、いつかこの男を僕の側に性向に引きずり込む秘かな企みは、捨てないでおこうと思つた。

空は満天の星であり、頭部が大きくその割りに手足の短い東洋人のサトシと、並外れて手足の長い、顔が遙か高みにあるかのような西洋人の僕は、往來を吹きぬける悄悄とした秋寒の風に吹かれ、無言のまま暫く一緒に歩き、その夜は各々のねぐらへ別れ別れに歸つた。

それから後の初冬、小春日和のある午後。

僕はいつものように表の電車通りまで真直ぐに出ず、気まぐれに、大徳寺の境内を横切る石畳の回り道を歩いた。電車通りまで行き着く路地の角に、小さな喫茶店がある。この店は觀光マップに載っているらしく、いつも若い女達で溢れていた。僕は時々、軽い朝食を摂るためその店に立ち寄る。女達はいつも無関心を装つて、僕の異形な姿を遠巻きに眺め、ひと言二言、小声で囁きあうのである。

大徳寺という、古い日本の文化の一端を覗い知ることのできる有数の禪宗の寺と、今風のこの小奇麗なカフェにどんな連なりがあるというのか、僕の世界とはまったく無縁ではあるが、ロンドンやニューヨークの若い女達と同種の装いをしたこの国の若い女達は、僕の生まれながらの西洋人の姿におそらくは無関心ではいられないものらしい。僕がいたずら心

で軽く笑いを浮かべ会釈をすると、含羞の顔付を微かに示し、あらぬ中空に視線をそらすか、開き直つて親愛の情をこめた柔らかな笑顔を作つたりするかのどちらかだ。僕にしてみればロンドンやニューヨークでは見られぬ光景に、腹の底でかたりのスーベリオリティ・コンプレックスを感じる。西洋の異形の風体に対する関心は、この国でいまだ憧憬の域を出ていないのだろうか。明治の文明開闢から一世紀以上を過ぎたというのに。

そのフランス語の固有名詞の付いたカフェの角を曲がつたところから、表の電車通りが見え、向い側の舗道上の電車待ち用のベンチに、腰を深く沈め足を投げ出し、目を瞑つているサトシの姿を見かけた。向こうはこつちに気付いていないようで、信号をやり過ぎし横断歩道を渡りきると、直ぐ間近に来てサトシはまだ気づかない。そして、軽いイビキさえ聴こえる。

冬空の雲の切れ間から陽光が明るく射し、サトシがその時着ていた黒いヨレヨレのジャケットは光を吸い込んで、まだろむ心地よさを十分に与えていたらしい。

「サトシ！」

僕が回りの人に覺られぬよう、サトシの眼前に腰を屈めて、小声で名を呼ぶと、サトシはやつと薄目を開けた。

「・・・ステイブ」

「どうしたの？ こんなところで」

僕が微笑みながら云うと、

「昨夜あまり眠れなかつたから、街の映画館にでも、行つて

眠つてやろうと、電車を待つてたところだ。暗い映画館なら昼でも眠れるだろう」

僕は屈めていた腰を伸ばし、一瞬僕の本心を隠さず、多分虚無的に見えるであろう眼差しで、真上からサトシを見下ろした。

サトシは日差しを遮るために掌を廂がわりに被せて、一瞬の僕の目の色と寸分違わぬ、薄ボンヤリとした視線を僕に投げ返す。

「今日はすつかり疲れてしまつているようだね。君の手は八十歳のお爺さんの手のように見えるよ」

「そうか・・よく気づいたな。俺は睡眠不足が、頬がこけるのと手の甲に出るんだよ」

サトシの手の甲は、細い入り組んだ皺が無数に浮き出て、老人の手のように見えた。

「どうしてそう眠れない？」

「眠るのがこわいんだよ・・いやな夢ばかり見る」

「いやな夢？」

「そう。ナイトメア」

その話を聴かせてくれと、僕はサトシを今通り過ぎて来たばかりの喫茶店に、誘つてみる。サトシは断る理由は何もないという素振りをし、引きずるような疲れた足取りでついて来た。

僕はコーヒーを二つ頼んだ。

「ナイトメア、うらやましい。僕はそんな経験ないんだよ」
本当は僕だつていろいろんな夢を見る方だが、折角サトシがメ

ランコリックに吐いた科白を打ち消すようで、心にもないことを云つてやる。

「お前が夢を見ないつて？ それは信じられない」

薄々僕のウソを見抜いたのかサトシはそう云い返した。サトシはどうやら僕の心の動きに馴れたらしい。僕もそろそろ本心からサトシを誘つてみようと思ひしかける。どういふことかは知らないが、疲れきつて投げやりに見えるこのチビな東洋の男を、僕の手中におさめる絶好の機会だとその時思つた。

「君が僕とやつてくれるなら僕は君の願いを何でも叶えてあげるのだが・・」

サトシは微かに動揺の色を見せた。いつもの泣き笑いのような表情を捨てる。大きな目の端をだらしなく下げ、身長割合いを比すと、異様に長い顔面部分を、殊更に際立たせる。

「どうしようもないことを云う奴だな、君は、なんでも叶えてやるとは一体どういうことなの・・俺の魂を売れども云うのか？ 君はメフィストフェレスだ」

僕はビククリした。この東洋の虚無的なチビの男が、ゲーテを持ち出すとは。

でも多分これも、ペダンチズムに違いない。

「そう。何でも叶えてあげるよ。お金でよければお金をあげる」

「バカな。俺はまだ女も十分に味わつていないのに、お前が如き毛唐のバケモノと何をやろうというのかバカな」

サトシは気色ばみ、己の置かれた屈辱的立場にハタと気づいたとでもいうように、彼にしては疾くも立ち直り、泣き笑いの表情を消し去り、屹然とした表情に変えて語り始めた。

「君ら西洋の人間は、皆疲れてしまったようだね。君が東洋の文化を、めしを食う手段と選んだとして、西洋が東洋と一体となることはない。西洋人が、西洋の歴史文化を、めしのタネとするには、カードが出尽くしたということだけなんだろう。ホモなんてもの、どういふものか俺は知りたくもないが、少なくともセックスに快樂だけを求めるしかないものでも理解する分には間違いないだろう。男と女のセックスなら、人類存続のための意味を持つだろうが、ホモセクシャルは人類の無限な連なりのために何の足しにもならない。西洋の文明がすべての国を席捲し、今もし続けているし、一部の国にとつてはいまだに目標であることは変わりがない。当分はそうだろう。アメリカが新興の国としてヨーロッパから分離して、最大の覇権国家であり続けられるか。ヨーロッパがアメリカを生んだ母としての文明だから、ヨーロッパの文化が永遠に続くのかというテーマと一緒だ。とはいいいながら、ヨーロッパの国々の文化が、均質にすべて同じとは、とても思えないし、アメリカには近代はあつても、独自の古い伝統や文化があるとも思えないが。

でももう無理だろうな。無理だと思うよ。ホモなんてものが市民権を得る、一見大変フレキシブルな見通しの開けた、理想的自由な世界のように思えるが、そんなもの屁のつつぱりにもならない。君の性的要求は快樂への慾求だけで、人類

社会の恒久的存続へ連なる何ものも齎すことはない。君のその哀しげな目は君が自覚しているかどうか知らないが、まったく虚無に満ちている。人類の破滅を心の奥底で予感しているかのようだ。ホモなんてもの人間社会の破滅を予兆する象徴みたいなものだ」

とどこどころ解らない日本語があつたけれど、いつも聴かされるご高説に輪をかけたものだった。

僕も莫迦莫迦しいと思ひながら云つてやる。

「サトシ、ちよつと待つてよ。貴方のご高説はすばらしいと思うよ。でもホモセクシャルが貴方の説によれば、西洋文明の申し子みたいに聴こえるけれど、日本にだつてあつたじゃないか、織田信長と蘭丸。衆道という言葉だつて残つてるし、男色というのも立派な日本語だよ。人間にとつてホモセクシャルは、永遠の謎のように思われていることは確かだし、今でも常に少数派で異端であるのは仕方がないけれど、文明や文化は異端の中から普遍が出ることだつてあるんだよ。オスカールワイルドしかり、テネシーウィリアムズだつて、経済学者のケインズもゲイだよ。音楽の世界なんていっぱいだ。マラー、チャイコフスキー、ミックジャガー、ルーリード。彼らはみんな文化的に人類に貢献していると思へなくもないよ」

「だからそれが、人類が退嬰し衰弱しつつある証なんだよ。かつて異端として退けたものを認めざるを得ないほど、人間は強烈な生存への意欲を失いつつあるんだよ。文明文化の進化や高度化は、種属としてのヒト科の存続する力を、逆に低

下させるんだよ。あらゆる異端を認め許容し世界が高度に均質化すれば、それで平穩であるか、誰も解つてるやつなんていないよ。ちよつと次元はズれるけど、君も知つてる三島由紀夫が生前何かに書いてるんだよ。

《日本はなくなつて、その代わりに、無機質な、からつぽな、ニュートラルな、中間色の富裕な、抜目がない、或る経済大國が極東の一角にのこるであろう》

これなんか、世界があるいは人間が、均質化することの危険性を仄めかしてもいるんじゃないかと、俺は考えるんだよ。このまま行けば日本なんて國、溶けてなくなると思うよ。何せ君のような、訳の分からん奴が、この國で生き延びようというんだからな。まつたく、日本と日本人をバカにするなどいうんだよ」

僕はサトシが怒つたことは解つたが、半分しか理解できなかった。だがサトシが引用したミシマの言葉の意味は解つた。「だからミシマはホモに負けたんだよ。ホモだつて生き抜いて、立派に業績を上げて、社会的地位を築くこともできるんだよ」

サトシは苦笑する他ないようだったが、こう云つた。

「それでも君は俺とやりたいか？」

「できればね」

「やつかない奴だ。そうだ。俺を思つてマスをやれ」

「マス？」

「そう、マスターベーション」

「・・・」

それつきりサトシとは音信が途絶えた。三条のビッグボーイにも姿を見せなかつた。もしかすると、僕を避けたのかも知れない。

しかし、更にそれから数ヶ月後、河原町通りの人ごみの中でサトシと出会つた。僕はこの國の人々の中に混じると、並み外れて長身だから、どんな人ごみからでも知人を見つけることができる。サトシは髪の毛をミシマのように短く刈り込み、就職が決まつたと云つていた。自衛隊にでも入るのだろうか？

僕は今でもサトシという惜しい獲物を逃したと思つているし、ミシマはホモに負けたと思うし、能の研究は続け、近々こちらの大学で学位を取ろうと思つている。

「了」